

云ふ便利なものが出来てます。大阪で駕籠と云へば、十日戎の寶惠駕しか見られません。以前落語家の連中が皆車で寄席を廻りました。其の時代に三代目文三はん（後に盲目になつた人）が赤い車に乗つて居られました。俗に赤車の文三と云ひました。松鶴も一つ變つた事をして掛持をして見よと、駕籠に乗つて席廻りをしよと戎橋筋から道頓堀へ行きました、尤も兩方の垂を下してござります、道路で見る人は碌なことを言ひません『八さん』『エ、』『駕籠に乗つて居ますなア』『ほんに、何ですやろ赤痢患者だすやるか虎烈刺だすやるか』『阿呆なことを言ひなはんな、避病院へ行くのとは駕籠が異なります、あれは普通の駕籠だす』今の時節に駕籠に乗ると言ふのはどうしたのだすやろ』『サア病人が入院でもするのだす』私は駕籠の中で聞いて腹が立て、病人でないと思はず爲めに、エヘンと大きな咳拂ひをしました、然うすると『ハ、ア、あの咳拂ひの具合では、あれは病人やない』『そんなら嚔行だすか』いよ／＼むかつて嚔行でない證據に垂の間からニユツと足を出しますと『ア、氣違ひや』と言はれました、何うも時世に後れたことを言ふものは可かぬものでござります。此のお話は時世に後れて居る、と言ふて、夫れを現代に替へられませぬ。其のまゝ棄て置くと云ふと折角斯うやつて出来てあるものを無くして了ひまするやうなことになります夫れでは作へた人に對して誠に氣の毒なと思ひます。此度上方はなしの雜誌へ書かして頂きます、御老體のお方は御案内の通り今宮から大和橋まで駕籠賃が五百十文、今宮には江戸吉、八百卯と申す駕籠屋かござりました。此の五百十文は駕籠屋

の親方が賃賃に取つて了ひます。然うすると、稼ぐ人間兩人は無賃で行かねばならぬと言ふやうな具合になります、其の代り、道へ出て走らせて呉れいと言ひますと、走り増賃と言ふて其頃でマア吝れた所で一朱、通常二朱、夫れからマア別走りになりますと一分、夫れが稼ぐ者の身附になりますので、其の間に雲助と言ふものがあります。是れは住吉街道ばかりでなく、京都へ行く伏見街道なり其他東海道、木曾街道、何處にもあります、夏冬共に禪一干で暮して居りました。東海道邊りの雲助になると、草鞋を質に置くものさへありました。然うすると質受けをせぬうちは草鞋を穿くことが出来ません、跣足で歩いて居たもので、然う言ふ荒くれない稼業の中にも妙なもので規則があります。夫れを堅く守りましたと言ふことを師匠から私も聞きました、住吉街道の雲助と言ふのは、是れは東海道邊りと違ふて禪一干ではお客が嫌がつて乗つて呉れません、縦ひ汚ない單物の一枚でも着て居りました、往來傍に空駕籠を下して客待を致して居りました『ヤイ汝れマア些とお客を呼ばんかい、居睡りばつかりして、乃公一人に饒舌らして居る、何を俯向いて愚圖／＼して居るのぢやい』『イヤ往きやアがつてもかまわん』そんな物往かすない』『乃公ア往かす積りぢやないが、勝手に向ふから往やがつて仕様がな』困るなあ何うも……ヘエ旦那お駕籠は何うでござりますな、お安う参りますが、旦那様お乗りなすつて下さい、お前も何とか言へ』『ヘエ駕籠へエかご……、ヘエかご』『ヤイだれにヘエ駕籠と言ふてるのや』『今足音がした』『馬鹿犬が通つたのや、しょうのない奴やなア、草鞋でもは